

田中十九三

皓

田中十九三

皓

句集

皓

参百部限定版奥附

平成一年十月一日発行

著者 田 中 十 九 三

埼玉県川口市朝日一―一―二七
電話〇四八二(三三)三二八四

印刷所 亀田印刷株式会社

埼玉県川口市本町三一六―九

領価 四、〇〇〇円

作品

句集·皓·目次

第一章	第二章	第三章	第四章	第五章	第六章	既刊句集
-----	-----	-----	-----	-----	-----	------

1	65	129	193	257	321	388
---	----	-----	-----	-----	-----	-----

第一章

陽炎のとりことなつてゐるふたり
涸れ川を生きかえらせる雪解水
どこまでも後ついてくる春の風
大海へ一直線に雪解水
雪解水あつめて川は生きている
街裏に隠れし春も動き出す
タイムカードがちやんと春が音立てる
おぼろ月こけしも眠たくなつてくる
梅林を出てから饒舌になる女
春うらら女教師も妊りて
うららかや土の匂いのハガキ来る
早春を壇輪の馬も嘶くや
芽吹くたび言葉が欲しくなる荒野
雪解どき光あふれている山河
水温み鯉も動き出す気配
春風に髪なびかせてゐる少女
蝶生まれすべてのことにさからわず
風になびく少女の髪に木々芽吹く
華麗なる春のはじめの花こぶし
蝸牛生涯放浪癖抜けず

十年の知己のごとくに蝶がくる
海の音風がはこんでくる辛夷
陽炎にとり残されている先祖
うららかや少女は指で考える
陽炎の只中にいて孤独かも
花辛夷少女の髪の匂いけり
野焼きして野焼きの匂い持ち帰る
春灯に孤独の影をおいてくる
大仏の手のひら蝶が触れにくる
陽炎の道葬列が通り過ぐ
脇役で通す男も春の宵
うぐいすに鳴かれ急しくなつてくる
雁帰る秘境の水は音もなく
うららかや皆が蝶になりたがる
陽炎にとりまかれたるロダンの像
雁帰る月のゆがみはそのまに
赤い橋わたれば春が見えてくる
般若の面付けて霞のなかにいる
大仏の顔いつばいの春の風
葬列を遠く見ている揚雲雀

陽炎のもて余したる兵の墓
イヤリングひらひら蝶が寄つてくる
春風の吹き抜けてゆく無人駅
原潜の浮上しそうなおぼろ月
いつときは初蝶行方不明になる
少年の夢がひろがる花菜畑
風光る生きるもの皆うつくしく
おぼろ夜をまた生きぬいてゆくふたり
透明な灰皿ひとつ陽炎えり
初蝶のもつれていたり石仏
風船の行方は風に聞くしかない
菜の花に色どられている母郷
姿見の奥まで春となる気配
菜の花に蝶は染つて仕舞いけり
花辛夷空の青さはそのままに
春なかば過ぎれば旅に出たくなる
菜の花が生けられ部屋中明るくなる
春灯にどこかゆるんでくることも
梅林を出てより女らしくなる
生涯を気ままに生きておぼろ月

菜の花のはなやかなれど村貧し
辛夷の花白と思えば白きかな
きさらぎの光は春の証かも
独り暮しが増えて辛夷の花開く
春風を体いつぱいの車椅子
劇中の劇を見ている春の宵
啓蟄の穴を出てから雪にあらう
春風に影を怖るる山の水
なわ電車花菜畑にきて止る
宣伝が効き過ぎ春に酔う草木
春風にとまどつている風見鶏
どこからも見えて桜の芽吹きけり
よきことのあるやも知れぬ啓蟄期
おおまわりして春の海に出る
浅春の山隠昏きものを抱く
水底に冬の名残りの雲流る
浅春や影うすれゆく昼の月
春風は無色鏡中吹き抜ける
おぼろ月ひとり化かされそうになる
早春の砂は手のひらからこぼる

春風に何想うかや紙漉女
春風に息やわらかき紙漉女
願いごと聴きとどけしや文の神
浅春の山より暮れてゆく故郷
雪解水海にそそげば海昏し
鳥帰る南の海は明るかり
辛夷咲く寺の一隅父母の墓
祝福の声あがりけり春の宵
別離とは悲しきものを朧月
春風の行き止りなる磨崖仏
なだらかな坂をのぼればおぼろ月
やんわりと赤子を抱けば春浅し
電柱の影長々とおぼろ月
雪解水あつめて滝は激しかり
浅春を掬のごとく僧がゆく
鳥帰る秘境の水は音もなく
吹く風も笏となりし春の雷
髪匂う熟年といふ女がひとり
春の月後ろ姿の老いにけり
春月に見え隠れして汽車がゆく

潮の香のとどくあたりの椿の森
おぼろ夜へみんな吐き出す緋のトア
曼陀羅の図式のよくな菜の畑
麦を踏む足の裏にも春の声
うぐいすを後ろの山で聞く夜明け
古暦捨てがたけれど春寒し
啓蟄が過ぎても雪の降る日あり
うららかや時計の針もゆるみけり
古池の蛙となりて泳ぐかな
海鳴りも遠くなりけり春彼岸
春岬鷗は沖を目指しけり
花菜畑ふたりでくれば蝶もくる
うぐいすもいのち大事に生きるべし
若者の動きに似たる揚雲雀
村中の木々驚かす春一番
暖冬と云われて春の寒き日々
海女たちもくわえ煙草の春の海
早春の海を見ている若い海女
辛夷咲く真下は古き墓場なり
不意に聞驚かせたる猫の恋

桃林どこも明るき甲斐の山
春曉の海へ乗り出す地引舟
蛇穴を出てばらばらになりけり
浅春の川風いつも寒かりき
早春の村喜怒哀楽のつづきけり
吊橋はゆれておれども春うらら
恋猫は西に東に急しからむ
おぼろ夜を口のまわらぬ少女がひとり
髭剃つて春の祭りの中にいる
葬列のあと陽炎の残りけり
越冬のつばめは故里の人のよう
春の野に降る雪なればあたかし
花辛夷人それぞれの生きるあり
早春の風はきびしく肌犯す
糸切齒今も用なす針供養
浅春をうりざね顔の少女もいて
手のひらに真赤な花びら落椿
スーパーへ女教師も買いにゆく
美しく老ゆるは難し花辛夷
浅春を風邪抜けきれずいるふたり

雪解水流れの果てにある破風
うららかや豪華な校舎も建てられて
日の丸の旗春風にはためいて
早春の街裏少し乱れけり
浮浪者のようにおぼろの街にいる
春風がはこんできたる良き匂い
早春の髪うつくしき少女たち
発つを待つ夜汽車をおぼろ月夜かな
春風に懐ふかく探られる
なだらかな山から先に芽吹きけり
切り株も大小ありて春の雨
春雨に濡るるは鴉ばかりかな
牧場に春きて馬は嘶けり
早春の海女は焚火の輪をつくる
陽炎にとりまかれたるけもの道
桃月夜友らとおおかた所かえ
早春の屋根にどつかと鬼瓦
曉の海をわたつて鳥帰る
黙りこむ男がひとり涅槃絵図
辛夷咲く寺に山門なかりけり

初蝶はだんだん体軽くなる
春風に五百の羅漢目覚めるや
春の風邪なかなか抜けずパンちぎる
鳥帰る空の青さはそのままに
たんぽぽの花はいつもの場所に咲く
きさらぎの森に分け入る鳥けもの
海鳴りのとどくあたりも朧なり
恋猫のまぎれ込みけり阿弥陀堂
海鳴りのとどくあたりは椿の森
梅林を出てから明るくなる視界
梅林にも売る店もなかなか
灯がひとつ点る春夜のおんな坂
花冷えや足の裏からくる晩年
花冷えも二人でいれば暖かし
おぼろ夜を半分暗き大樹かな
雪解水流れて川は迅かりき
たましいも慄たくなる芽吹きどき
花冷えの壁に般若の面をおく
花便りはこぶ郵便夫は若く
春愁の顔が並んでいる無台裏

春雷に耳立てている犬もいて
桃の屋鯨も動きはじめけり
長い橋わたれば春も日暮れけり
辛夷咲く言いたいことは云い尽くす
春の宵噂ばかりが広がれる
紅椿の匂いの中にいてひとり
昨日はない今日があるから梅かおる
東京にも土筆摘む野はありにけり
どれもこれも人の匂いのする土筆
喪の家の夜目にも白き花辛夷
土筆伸ぶ母を憎みし少年期
筋書き通りにゆかぬ晩年花の冷え
入れただけ木馬が動いている春日
うららかや離婚話がもち込まれる
陽炎に音も匂いもなかりけり
地図にない村から先に春がくる
針持たぬ女もまじる針供養
手をあげて朧月夜へ消えてゆく
万葉のあとを尋ねて梅かおる
しなやかな指が摘んでいる土筆

流水の去りたる海に鷗くる
花冷えの女にひとつ泣き黒子
花冷えの夜はふたりの方がいい
うららかや釦の穴もゆるくなる
村中の耳驚かす春の雷
きさらぎの空の青さを見ていたり
春の虹無縁でありし鳥けもの
浮世絵の写楽がものを言わぬ春
うららかや鷗ばかりの海になる
斬られ役ばかりしていて春寒し
春の夜ほもて余したる独り者
春風に女はすぐに隙見せる
針のない時計が春を告げている
雪嶺は遙かにありて草萌える
雪解けの水があふれている秘境
出港のドラにも春の響くあり
中老の女につらき初鏡
うららかや死神他人のようにくる
ひよつとこの面にも春愁の翳がある
牛売られ牧舎に残る春の色

誰も見ぬ雑木山にも春の彩
春の宵別れ話が急に出る
廻り道しても春風ついてくる
雪国の春はゆつくりやつてくる
切株は男の匂い木々芽吹く
過疎村をゆたかにしたる蝶の春
春の空何か一つが欠けている
春の夜を灯明るくしてひとり
ボケツトの中にも春の夢はある
耕して何も言わざる男と女
野仏も春の光を抱いている
尼寺に男の声のする春夜
骨壺の主幸せか春の宵
春風に少しねむたくなることも
陽炎に足の裏から眠くなる
全身に春の匂いのする若さ
陽炎の道ゆつくりとゆく晩年
方向が気になる春風ビルの街
解く帯の輪の中におぼる月

大仏の顔いつばいの春陽かな
雁帰る女は帰る家もたず
春の夜を单身赴任の男がひとり
雪嶺は遙かにありて桜咲く
野火あとに雨降り村は平和かも
春なれば秘境の風はやわらかし
風青し秘境に句碑の建ちてより
春なれば激しく動く鳥けもの
花冷えの夜は独りの手紙書く
少女らの髪の匂いもうらなり
春うらら昔のことは皆忘れ
花ぐもり遠くのもの恋しくなる
花種を蒔いて明日へ夢つなく
雁帰る先はシベリヤかも知れぬ
湖に水があふれて水芭蕉
陽炎のなかを真直ぐ歩きけり
春眠の深きに旅の疲れあり
うららかや人は五感をもて余し
真つ先に芽吹くは柳かも知れぬ
春夕焼け男を孤独にしてみよう

雪解水あつめて川はたくましく
おぼろ夜を歩き疲れるほど歩く
穴を出てようやく己に還る蛇
おぼろ夜を男ばかりがさ迷えり
なにもかも初蝶心得ている不思議
花冷えにひとり写楽の顔になる
真直ぐにゆけば土筆も伸びており
土筆野にきてから大きく息を吸う
じやがいに芽が出て村はゆたかも
姿見の奥にも蝶はもつれけり
耕してやがては老いてゆく定め
逃げ水のような女が振り返る
歩けるだけ歩いてみたい春の宵
卒業式くるから少女無口になる
梅散つてどうにもならぬ夜の刻
埴輪の兵春日たつぷり浴びている
春の昼深く眠っている赤子
春風にささやかれている耳一つ
春愁の顔が並んでいる酒場
ひとり暮しの女が花種蒔いている

おぼろ夜も大河は音なく流れけり
春や春貧しさ抜けぬ北の国
風ながる春の真昼のけもの径
雪解けの水をあつめて滝轟音
蝶々の一日もつれてゐる野づら
うららかや大きすぎたる紙袋
路のとう一つ二つと摘まれけり
零番地いちにち囀つてゐる雲雀
いろいろな顔春雨のなかにあり
春暁の石切場から轟けり
草萌える海女も妊る夜の刻
どこからか野焼きの匂いする真昼
春暁を囀る鳥に目覚めけり
土筆伸び背高のつぼばかりゐる
初午や甘酒ばかり飲まされる
柿植えてまだまだ生きるつもりかも
梅林に女は面を売りにており
きさらぎの雲の流れている大河
春の宵廻転ドアに吐き出さる
花辛夷流るる雲は音もなく

春田にも陽のたまりたる真昼かな
雪嶺は遠くにありて雁帰る
方程式解けぬままなり路のとう
ホテルには聖書置かれて鳥雲に
春風が松風になる海辺かな
梅散つて風は海よりくることも
春の山なだらかなれば墨を磨る
杉花粉に犯されたればうとまじき
三姉妹よちよち春を歩みけり
春の宵単身赴任の男がひとり
春空の果てに鷗の沖がある
青年の懐ふかく春の風
猫柳少しの風にゆれてゐる
おぼろ月影のうすれてゆく女
滝壺に色あざやかな落椿
耕してひとり手は休めけり
春暁にいつもの鴉啼きてすぐ
春潮の匂いが海鳴りのようにくる
野仏を遠くはなれて揚雲雀
花冷えを仏はみんな素足かな

路のとう誰にも気付かれないでいる
神前の灯明あかるく花の冷
路のとう苦味走つてゐる男
路のとう午後はとろりと眠くなる
桃咲くやローソク百本灯しけり
母の忌や春の光が見えてくる
春うらら岸につながっている小舟
おぼろ夜を海鳴りばかり聞いている
耕してひとりの修羅のなかにいる
雪女解けて流れの中にあり
たんぽぽの縄張りばかり増えてくる
路のとう夜はひとりの灯の下に
ひな祭り午後から水が軽くなる
きさらぎの秘境は水の音ばかり
椅子の向き変えて人待つ春の宵
それぞれの生き方ありて蝶は舞う
春風に胸ふくらます夢二の絵
きつぱりと別れた後の花の冷
象の耳大きくゆれる春の風
象の鼻ぞろりと春陽あびている

埴輪の目抜けて二月の風となる
花冷えの夕餉父の子の対話
雑木山芽吹くとき来て芽吹きけり
海祭り海女もいちにち薄化粧
春の浪テトラポットとむつみあう
灯を消しておぼろの月を見ていたり
花冷えの足の裏からくる齡
島帰り昔の人に逢いたくなる
海の音かすかに春日やわらかし
花種を蒔いて貝にもなれずいる
霞食う仙人ならずともさみし
鶏一羽骨まで叩く春日和
陽炎のなかで乳房あたえおり
花冷えの手はポケットの中にあり
色眼鏡して花見る列の中にいる
言い訳はしない春風くるからは
穴を出てから隙のない蝮
無表情な男がひとり花の冷え
花の山いずこも人間くさくなる
春なかば末だ故里に雪残る

独りぼつちでいたいときあり花辛夷
さくら散る風あるときも無きときも
散るさくら醜きものは振り向かず
花ぐもり大きな橋をわたりけり
唇の紅が春風呼んでいる
雑木山の芽吹くを待つている小鳥
蝶うかれ風やわらかくなりけり
じがら踏む足の裏からくる晩年
水車廻つて春をきしませる
川風も温とくなつて鳥帰る
揚雲雀外敵見えるまであがる
花雲り女も酒を飲みにゆく
居酒屋にあつまつていて花の
おのずから癪^{タガ}がゆるんでくる春夜
肩書きが邪魔して花の奥見え
花散つて用をなさない時刻表
陽炎の只中をゆく一輛電車
尼僧にもあわき想いのあるおぼろ
知られたくない秘密を抱いている辛夷
うららかやローカル線に乗つてゆく

手をあげるだけで通ずる花見客
陽炎にとりまかれたる赤電話
暮れてゆく空にくつきり花辛夷
彼岸桜誰にも犯されないうる
陽炎のなかで言葉をつまらせる
花辛夷互に過去には触れずいる
滝壺は春の光を溜めている
見たことのない顔ばかり花の山
灯を消せばおぼろの月に覗かれる
おぼろ夜の海には海の風情あり
麦伸びて風はぬくみをはこびくる
花冷えのひとりは大仏の胎内に
春うらら女は嘘をつきたがる
陽炎の径たくましき女もいる
己が夢語り尽くして蝶が舞う
揚雲雀自由気儘な堤外地
無人駅蝶も切符を買いにくる
何ごとともなかりしごとく陽炎えり
今日に今日重ねて眩し花辛夷
考えるロダンの像に散るさくら

国境越えても春風ついてくる
花散つて秘境にあおい夜がくる
花散つて秘境は水の匂いする
たくましく花を咲かせているたんぽぽ
陽炎のなかで積木の家が建つ
晴れた日の蝶は明日を考えず
花散らす風が主役となる秘境
土筆野に遠い昔がよみがえる
おぼろの夜刃物を研いでいるは誰
過去一つたぐれば春が見えてくる
たくましく生きて蝶にもなれずいる
冬越の燕が先にひるがえる
花散つてとり残されているロダン
落花あび医師も教師も酔っている
水の匂いの母が遠くにいるおぼろ
積木の家蝶が生まれてくることも
さくら咲き故里人は出稼ぎに
蝶といて少年夢を持ちつづく
釘抜けば春がゆるんでくることも
故里の五月の家は明るかり

土筆野にあるかも知れぬ指定席
陽炎のなかで孤独になつてゐる
花曇り埴輪の馬は嘶かず
陽炎の野をゆつくりと歩きけり
春の声聞こえてきたり赤電話
ひらがなの柔かさでくる春の風
雪解水あつめて海へ流れ込む
揚羽蝶いちいち重い影を曳く
猫柳ゆれても誰も振り向かず
男結びの風呂敷包み春の風
俎の創の中まで春の風
人の死に風やわらかき春の宵
忘れたい過去一つあり土筆伸ぶ
大揚羽句碑をめぐりて日暮れけり
雪解水はじめは音もなく流れ
滝音も元をただせば雪解水
春の海大声あげてみたくなる
淋しくて早春の森へまぎれ込む
針のない柱時計が春を打つ
おぼろ夜の地蔵に言葉かけてみる